ナス　アブラムシ類について

図１　アブラムシ類（赤丸内）

１　生態

県内のナスで見られる主要なアブラムシ類はワタアブラムシとモモアカアブラムシである。

本県では成虫での越冬は難しく、草本等に卵で越冬する。春先に孵化したアブラムシ類は有翅虫であり、ナスなどへ飛来する。有翅のアブラムシ以外は移動することは少なく、群生し、吸汁を繰り返す。アブラムシ類の雌は単為生殖を行うため、爆発的に増加する。越冬前、生物の多様性を保つためだけに雄が産下され、雌と交尾する。

なお、アブラムシ類にはテントウムシやアブラバチ、ヒラタアブなどの天敵が多く存在することや、アリと共存することが知られている。

ナスの被害としては、吸汁による生育阻害（とくに幼苗期）、排泄物に発生するすす病の被害やＣＭＶ(キュウリモザイクウイルス)などのウイルスを媒介する。

２　発生状況

春先と秋に有翅虫の発生が多く現れ、ナスほ場へ飛来する。天敵が多く見られるナスほ場内では多発することはない。

夏期に気温が高くなると、アブラムシ類の活動は弱くなり、逆に天敵の活動が活発となり、ほ場内の密度は低下する。また、露地では気象の影響を受けやすく、降雨が続くと減少し、晴天が続くと増加する。

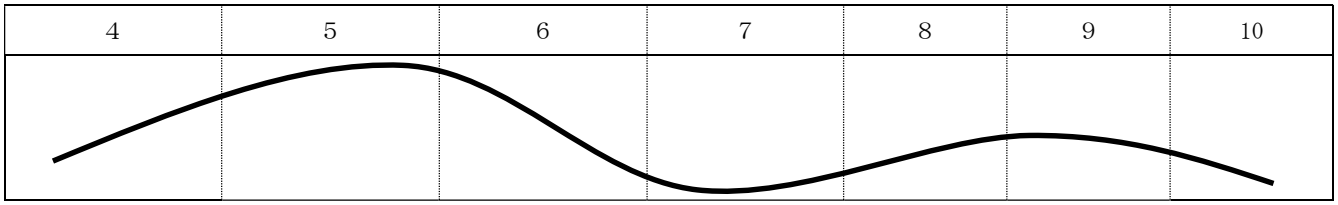

図２　アブラムシ類の発生消長

３　防除対策

（１）物理的防除

ほ場内外の雑草等で増殖するため、生息場所となる雑草を除去する。また、育苗時に発生した場合は、寄生株を本ぽに持ち込むと多発するため、定植時にはアブラムシ類の寄生の有無を確認し、健全な苗を定植する。

シルバーマルチ・シルバーテープ等の忌避資材の設置や、ほ場の周辺に防虫ネットを展張し、アブラムシ類の飛来侵入を防止する。

（２）薬剤防除

多発してからの薬剤防除は効果が劣るため、発生前や発生初期に薬剤防除を行う。特にウイルス病に感染すると、治療法はないため、定植時には必ず粒剤を施用する。

散布薬剤は浸透移行性のあるものを用い、虫体にかかるよう丁寧に行う。

気門封鎖系統の薬剤は虫体にかかることで、気門を封鎖し、窒息死させるため、虫体に確実にかかるよう丁寧に散布する。なお、残効性はないため、散布後は必ず効果を確認する。

薬剤によっては天敵への影響が大きいため、薬剤の選択に注意する。また、アブラムシ類は薬剤抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用は避ける。